

謎の発生

——「お月さん幾つ」考——

武笠俊一

要旨

本稿は、古くまた広く歌われてきた童謡「お月さん幾つ」の難解な歌詞について、先学の議論を整理し、新しい解釈を提出するものである。われわれは、「十三七つ」型が原型であるという定説を再検討し、「十三ひとつ」型がより古く、この言葉は十四月夜を意味するという仮説を立てた。これによって、中世においては十四月夜が「子持ち月」と呼ばれていたことから、この歌の原意が身よりのない子どもを生んだ少女の悲しみを歌ったものだという結論に達した。

一 はじめに

わらべうたの中には、歌詞の元の意味が忘れられて意味不明になってしまったものや、ナンセンスな言葉の連続であるものが少なくない。そういうわらべうたの中でも「お月さん幾つ」は「かごめ かごめ」とならんでとりわけ難解な歌詞を持つものとして知られている。そのため多くの人々がこの歌をくり返し議論の対象としてきたのであるが、長い努力にも関わらず、解明された謎はごく少ない。

本稿は、「お月さん幾つ」の謎について先学の議論を整理し、ごく一部分についてはあるが、新しい解釈を提出しようとするものである。

る。

「お月さんいくつ」は、全国に広く普及している童謡だが、同時に長い生命力をもつ歌でもあった。童謡研究の第一人者浅野建二は、この童謡の近世の書籍に記載された例を多くあげ、「古謡の中でもこんなに広く且つ古くから諸書に散見するわらべ唄は珍らしい」と述べている¹⁾。

その長い歴史と広い分布のため、この童謡は柳田国男門下の民俗学者がもつとも熱心に採集に努めたもののひとつであった。そのおかげで、全国各地の伝承が克明に記録されている。次に掲げるものは、そのなかでもつとも典型的な歌詞で、その分布はほぼ日本の全域に及ぶ。

お月さん幾つ 一三 七つ

まだ年としア若いね あの子を生んで

この子を生んで 誰たれに抱かしよ

お方に抱かしよ お方どこへ行た

油買いに茶買いに油屋の前で

こまってころんで 油一升こぼした

その油どうした 太郎どんの犬と

次郎どんの犬と みな舐めてしまった
その犬どうした 太鼓に張って

鼓に張って

あっち向いちやドンドコドン
こっち向いちやドンドコドン
たたきつぶしてしまった

民俗学者によってこれまで採取された歌詞の大部分は右のものときわめてよく似ているが、他方でこれと一部を共通にしながら大きく異なる歌詞をもつものも少なくはない。なかには、最初の一行以外まったく異なっているものすらある。その変異はあまりに多岐にわたっていて、相互比較もほとんどできない。たとえば南方熊楠が採取した和歌山県の歌詞は、他の地方のどれとも類似せず極めて特異なものと言える。

しかし、右に掲げたもつともポピュラーな歌詞には、それ以外のものと区別される一つの大きな特徴がある。それは「油買いに」という語句の有無で、これを持つものはほ同一の歌詞をもつ。差異があるとしてもごく小さく、広い分布にもかかわらずその変形の少なさにむしろ驚かされるほどである。ここでは、右のもつとも典型的なタイプを他と区別して「油買いに」と呼ぶことにしたい。

このタイプの歌詞は、歴史的に遡ってももつとも多く見いだされる。この歌は、江戸時代の児童遊戯を採取した書籍には必ずといってよいほど記載されているが、そのほとんどがこのタイプの歌詞である。そのうち、もつとも古いものは、寛政九年の『諺苑』所収のものと言われている。⁵⁾「油買いに」の江戸時代の広い分布を考えると、この型が、近世初頭以来の「お月さん幾つ」の発展の最後に位置する完成型であっ

たと思われる。

もつとも、「油買いに」ですら歌詞の意味は不明で、統一性にも欠けている。多くの研究者がその意味の解明に努力してきたが、諸説は相互に矛盾・混乱し、一致点はごく少ない。そこでわれわれは、先学の議論の再検討を出発点として、この難解な歌詞の解明に挑戦してきた。

二 月と子守りの問答の意義

まず、この歌の形式であるが、これについては多くの先学が「月」と「子守り」との問答形式の歌だとしている。これについては異論はあまりないだろうが、問題は、この歌のどの部分が月の歌う歌詞でどこが子守のものかを確定する作業である。これがはっきりしなければ歌の解釈自体ができるはずもない。ところがこの重要な問題について緻密な作業をした論考はこれまでほとんどなかった。唯一、国文学者の仲井幸二郎が次のような解釈を示しているだけである。⁶⁾

子守女 お月さまいくつ

月 十三七つ

子守女 まだ年や若い

月 あの子を生んで

子守女 誰に抱かしよ

月 おまんを抱かしよ

これを見ると仲井は、子どもを生んだのは月だと考えて、「誰に抱かしよ」を子守りの発した問いとみなしていることが分かる。しかし、この例では「この子を生んで」のフレーズが抜け落ちていて一般的な

解とは言い難い。また、「誰に抱かしよ」が子守りの問いなら、これに続く「お万どこいった」は当然子守りの問いということになる（もつとも仲井はこのことについては明言していない）。しかし、それに後続する尻取り歌の面白さは、答えの部分の奇抜さにあるのだから、それは実際の歌い手である子守や子供たち自身のもだと考えるべきではなかるうか。そして、尻取り歌の問いを月のものと考えるなら、その直前の「誰に抱かしよ」も月の問いと考えるべきであろう。

以上の分析を前提にして、最初に掲げた典型的な歌詞を、問と答えの歌詞の長さをそろえて整理しなおすと、以下のようになる。この歌は五つの問とそれへの答えからなる、比較的単純な構成のものであることが分かる。

①子守の問い

月の答え

子守

②月の問い

子守の答え

③月の問い

子守の答え

④月の問い

子守の答え

⑤月の問い

子守の答え

- ・ お月さん 幾つ
- ・ 一三 七つ
- ・ まだ年としア若いね
- ・ この子を生んで
- ・ お方に抱かしよ
- ・ お万どこへ行た
- ・ 油買いに茶買いに
- 油屋の前で
- 油一升こぼした
- ・ その油どうした
- ・ 太郎どんの犬と
- ・ その犬どうした
- ・ 太鼓に張って

あの子を生んで
誰だれに抱かしよ

誰だれに抱かしよ

誰だれに抱かしよ

次郎どんの犬と
みな舐なめてしまった

- ・ その犬どうした
- ・ 太鼓に張って

あっち向いちやドンドコドン
こっち向いちやドンドコドン
たたきつぶしてしまった

これを見ると、①②とその後の問答とでは異質な印象を受ける人が少なくないであろう。③以下の問答は、いわゆる尻取り歌となっていないだけでなく、滑稽味を追求したナンセンスな遊戯歌であるからである。そのため、多くの人がこの部分は後からの追加であろうと考えてきた。

この漠然とした印象にたいし、明白な根拠を示したのが仲井である。かれは、前半と後半の境目にある「おまんに抱かしよ」について、このフレーズの原義は「お前さんに抱かせよう」だと指摘し、それに続く歌詞は「『おまん』を人名とうけとって、あとは問答体が自由に連想によって展開して」いったのだという。

仲井の、「お万」の原型が「お前」であるという説は卓説であると思われる。というのは、この説に立つならば、この歌の前半は子ども相手に飽きた月と子守りがたがいに子どもを押しつけあっている、労働歌としての守歌であると理解できるからである。

「お前」の意義が忘れられることによって後半の尻取り形式の歌詞が生じたのだという仲井の指摘は、歌詞の後半が前半が完成した後に追加されたものだという仮説のもっとも良い論証となっている。つまり「お万どこへ行た」に先行する①と②の部分こそが、この歌の原形なのである。われわれは仲井の卓抜な見解に敬意を表し、論証の焦点をここにあてたい。

三 「十三七つ」と「十三ひとつ」はどこちらが古いか

「お月さん幾つ」の歌詞については、近世以来さまざまな議論がなされてきた。しかし、ここでは古い時代の考察に拘泥する煩をさけ、近代のものに限定して先学の説明を比較検討してみたい。

われわれがまず最初に注目すべきは、当然のことながら柳田国男のものである。彼は、民俗学のあらゆる領域に手を染めた巨人であったから、この童謡にも強い関心を向けた。彼は「小さき者の声」（昭和二年）という高名な論文の冒頭で、彼自身幼時にこの歌を新月に向かって歌った記憶があるとのべて、次のような分析を行っている。

まず彼は、各地で採取された歌詞の最初の部分を比較検討して、「月をノノサマと謂ふものと、アトサマと呼びかけたもの」の二つがあることを指摘する。たとえば千葉では「ノノサマ」と呼び、淡路の洲本では「アトサンなんぼ」と歌っていたと言う。そして、「アトサマ……」の歌詞が「お月さま」より古い形だと考えた。さらに「此等の月の異名がもと礼拝から出て居る」とし、「アトサマといふ言葉が、月ばかりで無く色々な尊いものに、次第に延長して行った」と指摘している。彼は、仏僧を「アトサマ」「ノノサマ」と言い、神・星・葉を「アトサン」と言うのは、「アトサマといふ言葉が、月ばかりで無く色々な尊いものに、次第に延長して行ったこと」の結果だといふ。

「子供と言葉」（昭和一〇年）ではこの論をさらに発展させて、関西各地の小児語では、月だけでなく、神や仏もアトサンと言うが、それは「もとはア、タウト、即ち拝む言葉であつた」と言う。

柳田の月の異名についての分析は面白いが、それは幼児語における身近な人々への呼称の分析に進み、「お月さん」の歌詞そのものの分析に向かうことはなかった。

柳田国男の先駆的な研究のあと、多くの研究者がこの童謡の採集と分析に努めた。その主要な論考の一つに金関丈夫の「お月さまいくつ」がある。この論文は、それまでの研究の集大成であると共に、中国大陸の類似した童謡との比較を試みていて、興味深い。かれは、台湾や広州、福建等の中国南部に「月光々」で始まる童謡が分布していることに注目をして、大陸の童謡が「南中国から長崎あたりに伝わり、それが次第に日本全国に広まった」と主張している⁽¹⁰⁾。その可否は見極めたいが、貴重な論考である。

この歌の歌詞は日本各地で大量に採集されているが、そのほとんどに共通するのが「十三〇〇つ」というフレーズである。「十三七つ」のほか、このフレーズには、「ひとつ」「九つ」など幾つか種類があるが、どれが原型か、またそれがどんな意味をもっていたかは容易に結論を出しがたい。それゆえ、このフレーズの分析について実にさまざまな議論がなされてきた。

たとえば、金関丈夫は、十三ひとつ型と十三九つ型が分布する地方にも十三七つ型が共存していることを根拠に、「十三七つ」が祖型であると述べている⁽¹¹⁾。当然のことながらこの説を支持する研究者は多い。この歌の地方的差異について詳細な検討を行った右田伊佐雄は、「一つ」「七つ」「九つ」に「みつ」を加えて四類型を提示した。最後の「みつ」は、右田自身が大阪府内で数例採取したものであるという。かれの作成した四類型の全国分布の一覧表をみると、「ななつ」が全国に広まっているのにたいし、これと重複しながら、「九つ」は中国・四国地方に、「みつ」は近畿地方に集中していることが分かる⁽¹²⁾。右田は、この分布表に依拠して、「『ななつ』が全国各県に一樣に伝播しているのに対して、『ひとつ』や『このつ』が部分的にすぎない」こと、「江戸時代の記録が『ななつ』しか発見されていない」こと

二点を理由に、金関と同じく「七つ説」を支持している。⁽¹³⁾

また、真鍋昌弘は、右田より早くこのフレーズの全国的な分布図を作り、それに基づいて「十三九つ型」が古いという推測を行っている。彼が自説の根拠としたのは、この型が日本の両端に分布していること（柳田の方言周圏説にもとづく）、瀬戸内海沿岸に一樣に分布していることなどの事実であった。⁽¹⁴⁾ 真鍋の示した仮説は安易に無視しうるものではない。しかし、彼の主張は幾分控え目で検討にも不十分なところがあるのが惜しまれる。

なお、金関と右田は「一つ」のフレーズは江戸時代の文献にはまったく見つかからないとしているが、『荷堂半水編『花袋』（元治元（一八六四）年）や『守貞慢稿』（嘉永六（一八五三）年）などにこのタイプの記載例がある。⁽¹⁵⁾ しかし、この類型がごく少ないことは確かである。

以上に見たごとく、研究者の多くは「十三ななつ」が最も古いという見解を支持してきた。しかし、少数ながらこの見解に反対する研究者も存在している。言語学者の金田一春彦は、このフレーズの古い形は「十三ひとつ」だったという前提にたち、次のような主張をした。

「十三一つ」とは十四日目の月のこと、お月さんは盛りが十五夜であるから、十四夜ではまだ年が若いということになるのである。それが「現行の」「十三七つ」となつては意味がわからなくなる。⁽¹⁶⁾

金田一は、この答えは月齢だという前提にたつて、十四夜以外は意味を持たないと考えた訳だが、右の説明では、問いに対する答えが何故十四夜でなければならないかという疑問に対する説得力は弱い。

以上のように先学の考察は、「二つ」説、「ななつ」説に二分され、互いに少しも譲らないのであるが、私は、「七つ」説には疑問を感じている。この説に依拠する論者がことごとくこの歌詞の解明に失敗しているからである。この点について次に検討しよう。

四 「十三七つ」の解釈について

「十三七つ」解釈については、先学によって実に様々な意見が提出されてきた。その多岐にわたる議論をまず右田の整理にそつて検討してゆこう。右田は、それを次の四種に分類した。⁽¹⁷⁾

- (一) 加算して年齢とする説
たとえば「十三七つ」なら、二十歳となる。
- (二) 十三夜の月の七つ時とする説
これは『俳諧崑山集』中の「お月さまいくつ十三七つ時」の句に基づく説で、十三夜月はおよそ七つ時（午後四時すぎ）に出るといふ事実を歌つたものだとする。
- (三) 十三夜月と十七歳女子の対比説
これは、八重山の有名な民謡「月の美しや 十日三日 女童美しや 十七つ」に基づくもので、「お月さまが美しいのは十三夜、娘が美しいのは十七歳」という意味だとする。
- (四) 閏月七回説
これは国文学者山田孝雄の説で、旧暦で閏年（年一三ヶ月）が十九年に七回あることを歌つたとするもの。

右田は、先学の四つの説のそれぞれを批判・検討し、「十三七つ」の意味は（一）の加算説以外には考えられないと言ひ、このフレーズ

は二十歳を意味すると結論している⁽¹⁸⁾。

参考までに、右田以前の論者の主張を紹介しておく。相馬大は(二)説支持⁽¹⁹⁾、金関は「現在、最も妥当な見解とされているものは、月齢とする説と、娘の年齢とする説の二つである」と言っているから、(一)、(二) 両説のいずれも決めかねているようである。また、桜井満は、これを十三夜月を歌ったものとし、「七つ」は「調子を整えるだけの言葉だったかも知れない」と述べている⁽²¹⁾。

大ざっぱに見れば(二)説を支持する者がやや多く、(一)と(四)を支持する論者はごく少ない。吾郷宝之進は、(二)を支持しつつ、「人の年齢としては『十三、十七』の省略形としての意味をあわせて意識されていたのかも知れない」と述べているが、このあたりがもっとも多く支持される考え方といえるかも知れない。

ちなみに、(三)説は沖繩研究者によってくり返し主張されてきたものだが、彼らはそのプライオリティを柳田国男に求めている。しかし、吾郷によると柳田の著作にはこの説にふれたものがなく、学説史上の謎となっているという。興味深い問題提起である。

右田は、加算説を前提として「あの子を産んで、この子を産んで」という歌詞も、二十歳なら「二児の母であってもおかしくない」と説明している。「まだ若い」というフレーズについては、柳田説を援用して、『ののさん』(神様)にしては『そらまだ若い』ということになった⁽²⁴⁾と言う。この文章は分かりづらいが、お月さまなら永遠の命をもつから二十歳でも若いと考えられたことだろうか。いずれにせよこの部分の右田の説明はあまり説得力があるとは思えない。私は、右田の加算説の正しさを認めた上で、二十歳の出産を「若い」と呼ぶことには無理があると思う。

金関は、二十歳の娘は当時としては適齢期を少し過ぎているから、

この句は「その娘に対する皮肉なあてつけである」という説を紹介している(論者不明)。この説が根拠としているのは、「若い」のあと「若うもごんせん はたちでごんす」と続く兵庫の歌詞だと言う⁽²⁵⁾。しかし、金関の指摘するように、この歌詞自体が元の意味が忘れられた後に生じた「解釈」であることを示しているように思われる。

以上「十三七つ」についての先学の解釈を見てきたが、四つの説のうちどれが正しいか、結局結論は出しがたいように思える。支持者のもっとも多いのは(二)説だが、月の出が七つ時であるという答えがどのような意味をもつかについては、まったく説明されていない。十五夜ならともかく、十三夜の月が夕方四時ごろに出るという知識にどれほどの価値があるか疑問と言わざるをえない。この説を支持する論者が一人もこの点に触れていないのは、説得力のある説明が見つからなかったからであろう。

「十三七つ」についての先学の説明がすべて説得力がないとしたら、このフレーズが原型であったという仮説自体に疑問が生ずる。加算説の最大の弱点は二十歳を「まだ若い」と呼ぶことの不自然さにあるが、もしこれが十四歳であるなら、つまり、「十三一つ」を原型と考えるならば、この不都合は解消される⁽²⁶⁾。そこで次章では、この仮説に立つて、「お月さん幾つ」の再解釈を試みたい。

五 「子持ち月」の嘆き

われわれは考察の焦点を歌詞の前半に置いてきたが、この短い語句ですら難解で納得のゆく解釈は容易ではない。その最大の理由は何よりもまず、お月さんの年(月齢)についての問答と、それに続く子どもについての問答との間になんの関連も見いだされないことにある。そのために、古来この歌詞はナンセンスなものと判断されてきた。

そこで、まず出発点に戻って考えてみると、この歌の原型が月齢を尋ねる問答に由来するという点には議論の余地はないだろう。現代社会では必要性はほとんどないが、月の満ち欠けを見てその日の月齢を言い当てる「月よみ」の技能は、太陰暦の世界では極めて重要なものであった。それは単に一月の何日目かを知りうるという便宜ばかりではなく、夜間の作業や外出のために、あるいは未婚の男女の恋のために、明るい月夜が必須だったからである。

例えば、八重山の民謡「新安里屋ユンタ」には次の一節がある。

田草取るなら 十六夜月よ 二人で気がねも 水入らず

だから、十五夜前後の明るい月の月齢を読みとることはとくに重要で、そのためこのころの月は、十三夜、十六夜、宵待ち月、立待ち月などのように固有の名前がつけられていた。月よみは子どものうちから身につけておくべき大事な技能だったのである。この問答はそういう必要のなかから生み出されたのであろう。

もし明るい月夜が人々の生活に欠かせないものだったならば、「お月さま幾つ」の答えは、二十夜というような遅く暗い月夜ではなく十五夜前後の明るい月でなければならぬ。とすれば、この問答の答えは、「十三一つ」以外には考えられないのである。

そこで、「十四夜月」が何を意味していたかが、改めて問題となる。太陰暦の時代には月齢を示す固有の単語が広く使用されていたことは前述したが、では十四日の月は何と呼ばれていたか。中世において、それは「子持ち月」と呼ばれていた。このことを知れば、この答の含意は自ずから明かとなる。すなわち「十三ひとつ」という答は、月の年齢が「十四歳」でしかもすでに「子持ち」であることを示している

のである。十四歳で母親になったのであるから、当然のことのように「まだ年ア若いね」という感想へと連続してゆくことになる。これが子持ち月についての歌だとすると、次の問答もより正確な理解が可能となる。

子守り 　　まだ年ア若いね 　　あの子を生んで
月 　　この子を生んで 　　誰に抱かしよ
子守り 　　お方に抱かしよ

ここで、「あの子を生んで この子を生んで」は二人の子供の存在を意味するのではなく、月の手元にいる子を子守が「あの子」、月自身が「この子」と呼んでいるのである。

「年が若い」という文句は、十四の子を生んだ母親の年齢と解釈しての文句であるが、もちろん未婚であることを暗示しているから、「この子を生んで抱かせよう」とは、単なる赤ん坊の押しつけあいではなく、世話をすべき正当な保護者のいない幼児の境遇を語っているとも理解できる。抱いて十分な世話をしてくれる者がいない悲しみから、少女は「お月さん、お前が抱いておくれ」と哀願しているのである。

さて、最後に十四夜の月がなぜ子持ち月と呼ばれたのかを考えてみよう。その理由はこの歌が生まれた時代の人々にとっては自明のことであり、ことさらにここで論じるまでもないことも知れない。しかし、逆に言えば、この言葉が忘れられたために、「お月さん幾つ」の歌詞の意味もまた忘れられたと言っているのである。

中世においては、十四日の月は小望月と呼ばれるのが一般的であっ

た。その輝きが十五夜の月に比べて少し欠けるからだという。現代では、この言葉はまったく忘れられてしまったが、それでも俳諧の世界では秋の季語としてわずかに残っている。その「コモチヅキ」という発音を借りて、十四日の月は「子持ち月」と呼ばれたのである。

「子持ち月」は十四日夜の機知に富んだ異称として中世の文献にしばしば登場している。例えば、「小式部」には、

みなかみに、こと夜のしもは、ふらねども、七日／＼の月とあわれし

という和歌について、和泉式部が「七日／＼とは、十四日なり、十四日の月をば子もち月といひ、十五日のをは、もち月といふなり」と説明したとある。²⁹和泉式部の説明から、この和歌がなぞなぞ歌であったことが分かる。

また、『御伽草子』の「和泉式部」には

百年ももせに又百年は重ぬとも七つ七つの名をばたへじな

があり、「七つ七つ」は十四日の月を意味する。³⁰もちろん、和泉式部の、どんなに年をとっても「子持ち」と呼ばれたくないという気持ちを歌ったものである。

『御伽草子』は、和泉式部が十三歳で男と出会い、十四歳で子を産み、「子持ち」と呼ばれることを嫌って捨て子したと物語っている。この説話の意味するところは色々あるだろうが、ひとつの眼目は、このころ最も早熟な少女は十三で恋をし十四で出産するという事実を示していると言える。『御伽草子』は、この年齢がもっとも早いと認識

しつつ、道徳的な非難をしてはいない。つまり、作者にも読者にも、恋ができる年齢に達したものが恋をすることは当然だと考えていたのである。³¹

日本では月についての固有名詞は数多くまた使用頻度も高い。十三夜に始まり、望月、十六夜、宵待ち月、立待ち月、臥待ち月、寝待ち月等々の月齢を示す言葉は、近世の文芸に頻出している。しかし、不思議なことに十四夜を示す小望月だけは使われることが少なかった。小望月の忘却自体一つの謎であるが、それにともない「子持ち月」という言葉も近世の早い時期に忘れられてしまったと思われる。当然のことながら、小望月という言葉が生きている社会でしか、「子持ち月」という言葉の面白さは理解されないからである。

「子持ち月」という言葉が忘れられると、「十三一つ」は「お月さん幾つ」の答えとしての意味を失ってしまう。こうしてこの問答の意味が子どもたちに理解されなくなってしまうえば、それが「十三七つ」のような語呂のよい歌詞に移行してゆくのは、ごく自然の勢いだったといえるだろう。

当然のことながら「十三七つ」は問いに対する答えとしてなんの意味も持たない。しかし、歌詞の意味を読みとろうとする者の眼には、意味不明な語句は解釈を求める神秘的な言葉、あるいは解くべき謎とらう。こうして、新しく生じた歌詞に後から意味を付与する様々な努力がなされ始めるのである。「三つ」や「九つ」ではなく「七つ」が定着したのは、この語句が謎解きにもっとも適していたからであろう。「お月さま幾つ」は、謎の付与によって新しい生命力を獲得し再生し始めたのである。

注

- (1) 浅野建二編『新講 わらべ唄風土記』一九八八年 柳原書店 一四二頁
- (2) 町田嘉章・浅野建二編『わらべうた——日本の伝承童謡——』一九六二年 岩波文庫 一三五頁
- (3) 例えば、宝永元年(一七〇四)ごろのものとして推測される野間義学著『筆のかす』所載のものは次のごとくである(尾原昭夫編『日本わらべ歌全集27 近世童謡童遊集』柳原書店 一九頁)。
- お月さまなんぼ、十三七つ、なゝおり着せて京の町に出いたれば、
 筭落す、はな紙落とす、こうがい紺屋が拾ふ、はな紙はな屋が拾ふ(以下略)
- (4) 『南方熊楠全集 第二巻』 五二八〜五二九頁
- (5) 『諺苑』(尾原昭夫編『日本わらべ歌全集27 近世童謡童遊集』柳原書店) 四六頁
- (6) 仲井幸二郎「類型の詞章」(池田弥三郎編『ことばの遊びと芸術』一九七六年 大修館書店) 二二二頁
- (7) 仲井「類型の詞章」二二二頁
- (8) 「小さき者の声」『定本柳田国男集第二〇巻』筑摩書房 一九六二年 三五九〜三六五頁
- (9) 前掲『定本柳田国男集第二〇巻』四二六頁
- (10) 金関丈夫『お月さまいくつ』一九八〇年 法政大学出版会 一四二〜一五五頁
- (11) 金関前掲書『お月さまいくつ』 一三三頁
- (12) 右田伊佐雄『子守と子守歌 その民俗・音楽』 一九九一年 東方出版 二四四頁
- (13) 右田前掲書『子守と子守歌 その民俗・音楽』二四五頁
- (14) 真鍋昌弘「月の歌」(吾郷寅之進、真鍋昌弘編『わらべうた』一九七六年 桜楓社) 二五八頁
- (15) 『花袋』(尾原昭夫編『日本わらべ歌全集27 近世童謡童遊集』柳原書店) 一四二頁、『守貞漫稿』(同書所収) 三〇七頁。
- (16) 金田一春彦『童謡・唱歌の世界』一九七八年 主婦の友社 一五五頁
- (17) 右田前掲書『子守と子守歌 その民俗・音楽』 二四三〜二四五頁
- (18) 右田前掲書『子守と子守歌 その民俗・音楽』 二五二頁
- (19) 相馬大『京のわらべ唄』白川書院 一九六七年 一〇八〜一一〇頁
- (20) 金関前掲書『お月さまいくつ』 一三四頁
- (21) 桜井満『花の民俗学』雄山閣 一九七四年 一一七頁
- (22) 吾郷寅之進「わらべうたについて」吾郷寅之進、真鍋昌弘『わらべうた』一九七六年 桜楓社 三五頁
- (23) 吾郷論文「わらべうたについて」二七〜三二頁
- (24) 右田前掲書『子守と子守歌 その民俗・音楽』 二五五〜二五六頁
- (25) 金関前掲書『お月さまいくつ』 一三五頁
- (26) 右田は、加算説に立って、「十三ひとつ」は十四歳だとした上で、「これらの歌では原則的に出産の詩句が後続しない」から、原型ではないとしている(前掲書二五六頁)。しかし、彼が同じ論文で例示しているこのタイプの歌詞九例のうち四つには出産についての語句がある(二三八〜二四〇頁)。また右田自身が指摘しているように、南方熊楠は同様のものを和歌山県で採集している。しかも、これらの事例にはすべて「まだ若い」の語句が続いている。
- (27) 町田嘉章・浅野建二編『日本民謡集』岩波文庫 一九六〇年 三

九七〜三九八頁

(28) 「十三みつつ」なら十六夜で明るい月夜だが、この類型は分布範囲が狭く原型とは考えにくい。

(29) 「小式部」(横山 重・松本隆信編『室町時代物語大成 第五』一九七七年 角川書店) 三四〜三五頁

(30) 『御伽草子(下)』一九八六年 岩波文庫版 一三七頁

(31) この故事を知るなら、「十三ひとつ」は、十三歳で恋をし、一年後に子どもを産むという女性の性的成熟のもっとも早い年齢的可能性を示しているとも考えられる。もっともこの仮説は、「十四ひとつ」や「十七ひとつ」といった語句の用例が発見されないかぎり成りたち難い。今は指摘するにとどめておく。